



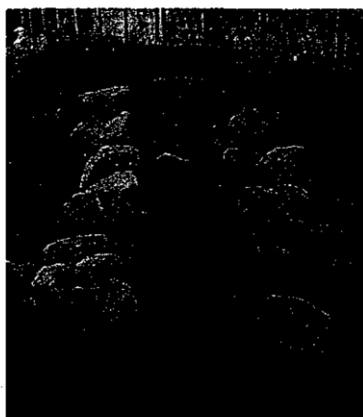
千畳敷で発見された土塁跡

飯盛山城跡

(その二)

歴史の舞台に数多く登場する飯盛山城、攻め落とすことも難しいとされたこの城も、実際のよう

うな城であったのかは、はっきりとわかっていません。現在、城の名残りののは、山中の各所にあり石垣や切り堀り（防御のために人為的に掘られた空堀）跡、廓（城や砦の周りに土や石で築かれたもの）の跡が残っているにすぎません。廓には物見櫓や館が建てられていたと推定されています。今年一月、この場所での発掘調査が実施されました。調査の結果、柱穴、道の跡、土塁の跡と考えられる遺構を検出しました。土塁は一部が見つかっただけで全体の規模はわかりませんが、おそらくこの廓の周囲を巡るようにして造られていたのでしょう。柱穴は、柵列などの施設に伴うものと思われる。どちらも、敵の攻撃から守るために造られたものです。今回の調査範囲では、館の跡は見つかりませんが、土塁で囲まれた内側に館が建てられていたでしょう。



宮谷一号墳の横穴式石室と埴輪

宮谷古墳群

(その一)

北条に宮谷川という川が流れていますが、この川の南側にあたる尾根上に、宮谷古墳群はあります。古墳群というのは、いくつかの古墳がまとまっている状態のことをいいますが、さらに古墳が狭い範囲に密集している場合は群集墳と呼ばれます。大東も含めた東大阪、八尾などの生駒山地西麓地域には、このような古墳群、群集墳が残っています。

される須恵器、鉄矛などが採集されており、地元の人々の話によると、いくつかが古墳の石室があったといわれていますが、詳しいことはわかりません。昭和六十二年九月から十一月にかけて、宅地造成に先立つ発掘調査が行われ、横穴式石室をもつ古墳が見つかりました。この古墳群で最初に発見された古墳というところで宮谷一号墳と名付けました。横穴式石室は、全長約九・二メートル、幅が約一・七メートルで、カコウ岩で作られていました。棺を置く玄室と、玄室へ通じる通路の羨道とに分かれ、天井の石はなくなっていました。残念なことには人骨は見つかりませんでした。石室のなかには、副葬品の須恵器や鉄製品、金環（耳飾り）が残っていました。